

初等教育資料 8・9月号 「話題」(巻頭言) より

「ある授業研究会で」 文部科学省初等中等教育局視学官 長尾 篤志

もう10年近く前のことである。ある高校の数学科の教員から授業研究会の案内があり、大学教員数名とその研究会に参加した。授業は大学受験を強く意識したもので、問題の解法の指導が中心になっていた。授業後の研究協議では、研究会に参加した大学教員から次のようなかなり厳しい疑問や意見が出された。「何のために数学を指導しているのか」「どういう視点で教材研究をしているのか」「生徒は今日の授業で何を身に付けたのか」「生徒の考えはどのように生かされたのか」など。授業者はそれぞれの疑問や意見に誠実に答えていたが、答えられないものもいくつかあった。

この授業研究会から数か月経ってまた、同じ教員から授業研究会の案内があった。前回のことが気になり、前もって電話して「前回とほぼ同じメンバーで参加したいと思っていますがそれでもいいですか?」と聞くと「はい。前回のリベンジをしたいので」という返事。授業は、生徒の関心や意欲を高めるよう教材研究がかなり綿密に行われているようであった。ただ、どうしても教員の説明が中心で生徒の考えを十分に生かしていなかったため、授業後の研究協議ではその部分に疑問や意見が集中した。2回目からさらに半年あまり経って、もう一度授業研究会の案内があった。このときの授業では、教材解釈と授業構成、生徒意見の取り上げ方や生かし方、途中での展開の微調整や最後のまとめ、そのどこをとっても素晴らしいもので、参加者からは感嘆の声が上がった。

授業参観後の研究協議では当たりさわりさずの意見が大半を占めることがある。しかし、**一人一人の子供にとって、その日その時の授業は生涯一度きりである。それゆえ、研究協議ではどうすればよりよい授業にできるか、誠意をもって真剣かつ率直に意見交換をすべきである。**それが授業者のみならず参加者の成長につながる。また、授業者にも、ここで述べた教員のように、「授業は子供のためにある」という強い思いと、どのような指摘をされてもそれを自分のプラスに変える打たれ強さが必要であろう。

「TLCに包まれて」 文部科学省初等中等教育局視学官 太田 光春

たしか5月4日(土)のみどりの日のことだったと思う。どこか遠くまでウォーキングに出かけたいが、学校の畑のことが気がかりだと妻が言い出した。妻の勤める小学校は隣町にあり、家からは片道約5キロ。私は、歩いて学校まで行き、畑に水を撒いて、帰り道に美味しいランチを食べることを提案した。

1時間足らずで学校に到着すると、噴き出す汗をぬぐう間もなくすぐに畑に行った。夏日のような陽射しを白く眩しく反射した畑土は、まるで渴ききったスポンジのようにたくさんの水を吸い込んだ。近くをアゲハチョウが飛んでいる。水をたっぷりもらった茄子、トマトが嬉しそうに見える。この原稿が活字になる8月には色鮮やかに実っていることだろう。この畑に接してクローバーが群生している。四つ葉のクローバーも見付かる幸せな空間だ。その一角にウサギの飼育小屋がある。妻が「ココア!」「ミルク!」と声をかけると、焦げ茶色のウサギと白いウサギが元気よく跳び出てきた。金網から鼻先を出し、それを小刻みに動かして、おねだりをしている。安心して、すっかり甘えている。妻は、クローバーを摘んで与えた。二羽は、ぴょんぴょんと跳ね回りながら、たくさん食べた。美味しそうに食べた。ちなみに普段の食事は、差し入れの野菜だそうだ。

その後、裏庭から玄関に向かって歩いて行くと、妻の受け持つ教室の前に人工の池があった。その池は、鳥対策の網で覆われていた。以前、アオサギが魚を一匹残らず食べ尽くしてしまい、子どもが大いに悲しむという事件があったらしい。妻は、おもむろにショルダーバッグから餌の入ったビニール袋を取り出し、ひとつかみふたつかみと水面に撒いた。すぐさま丸々と太った鯉の群れが、激しい水音を立てながら、我先に餌をむさぼりはじめた。中にはちゅばちゅばと空気をはき出す音を立てているものもいる。元気いっぱいだ。ふと、校庭に目をやると、サッカー部が顧問の先生に見守られて一所懸命ボールを追っている。その向こうで、木の勢定や草むしりをしている職員がいる。行楽地のにぎわいがニュースになるゴールデンウィークの祝日。そんな祝日に学校に来て、人の手を借りないと生きられない、人に100%依存した小動物や魚、植物の世話をしている職員がいる。その視野の先には子どもたち。おそらく全国の小学校に普通に見られる風景なのだろう。私はその風景の一部になってとても幸せな気持ちになった。**子どもたちが、安心して、屈託のない笑顔を浮かべることができる。TLCにあふれているところ。学校はこうでなくてはいけない。TLCとは、Tender Loving Care の頭字語で「やさしい心遣い」という意味である。**